

Title	産業と地域社会：M市の金物業について
Sub Title	Industry and community
Author	青沼, 吉松
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.5 (1953. 5) ,p.315(1)- 351(37)
JaLC DOI	10.14991/001.19530501-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530501-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

産業と地域社會

— M市の金物業について —

青 沼 吉 松

所謂金物の中に含まれている品種は複雑多岐に互るが、兎も角製造業と問屋との有機的連關の全體としての金物業が、町の産業の主要部分を構成している。このことはM市の産業構造を比較的單純化している。更にM市は大きな都市から相當に隔たつており、農村的環境に圍まれてゐるから、比較的封鎖的な社會圈を形成している。都市特に大都市の影響力が浸透すると、地域社會即ち村や町というような狹少な地域的社會單位の自己統一性乃至その封鎖性が破壊される。M市はこのような大都市の影響を蒙ることが餘り多くない。これら二つの事情はM市金物業を對象として、そこで産業と地域社會との關係を究明するための有利な條件となる。

この論文は産業と金物業を地域社會とM市との關連に重點を置いて、把握することを目的としている。かかる試みは地域的により廣汎な社會的觀點からの産業の把握を多少とも犠牲にしている。しかしその代り視野の局限によつて、より綿密かつ質態的な産業の理解が可能になるようである。社會の近代化は産業と地域社會との密接な關連を切斷して、産業をより大きな社會に適合せしめる傾向がある。従つて近代産業の理解のためにはそれを地域社會的視角からみるだけでは充分ではない。むしろ近代産業はここに用いられている意味の、狹少な地域社會の範圍を遙かに越

える國民社會的、世界社會的面から捉えらるべきである。それにも拘らずここで産業と地域社會とを關連付けようとするのは、M市金物業が近代化の遅れている産業であるからである。これを主要産業とするM市は社會生活のいくつかの面で前期的色彩を残している。近代化の相對的に遅れているわが國においては、ここで試みられているような研究を可能にする多くのフィールドが存在するようである。筆者は漁業に關する協同研究に参加することによつて、産業と地域社會との一層典型的な事例を調査する機会を得た。しかしわが國において近代化は現に或程度進んでおり、又それは停止するものでもない。従つてこのような研究は日本社會を理解する一つの手掛り以上に評價することは危険である。何故ならばこの過大評價はより廣汎な社會的視角からする研究の道を塞ぐからである。

一

M市は廣大にして、肥沃なK平野の略中央部に位置している人口約五萬の小都市である。M市は人口數ではS縣下第三位の都市であるが、それにおいて第一位及び第二位の都市とは夫々汽車で一時間以上の距離を隔てており、その周邊は農村地帯である。M市は近在町村の中心地としてそのための産業を幾多もつている。しかしその經濟生活の主要な支柱はこの産業ではなく、全國的視野をもつ産業Ⅱ「金物業」である。この盛衰がM市の浮沈を左右する。M市は「金物の町」として知られている。金物という言葉は凡ての金屬製品を包括する意味に用いることもできるが、ここではそれは金屬製品の一部即ち利器工匠具、家庭金物、建築金物、作業工具、度量衡器、農器具等を指す名稱として用いられる。就中刃物、大工道具はM金物の主要部分をなす。M金物の多くに共通する性格として第一にそれらが大工、小農等の小生産者の勞働手段及び家庭用器具として使用されるということ、第二にそれらの生産過程が機械

化乃至は工場化されていないということが挙げられる。

M市の主要な産業は製造業、農業及び商業であり、同市の就業人口の八〇%以上がこれらの産業に従事している。就業人口中製造業のそれが占める比率は五〇%に近く、農業のそれは二〇%に足りず、商業のそれは一五%を越える。これら三つの産業のうち製造業と商業とがM市に都市的性格を附與していることはいうまでもないが、これら兩者の主要部分が金物に關係するものであるということは注目しなくてはならぬ。就業人口中製造業のそれが占める比重が大であることよりみて、M市は「工業都市」的性格をもつていえる。

製造業のうち三人以下の従事者をもつにすぎない零細なものが、事業所數においては全製造業の約八〇%を占めており、従事者の數が一〇人を越えるものは七%にもみたくない。この點からすればM市は「零細製造業者の町」である。しかしこの僅か七%にもみたくないものが生産額では全體の約三分の二を占めている。製造業の經營規模の最大限は従事者二〇〇人程度であり、五〇人以上の従事者をもつ製造所の數は十數ヶ所にすぎない。これら少數のものが千三百にのぼる従事者三人以下の製造業の約一・五倍の生産額を示している。製造業従事者總數に對する夫々の従事者數の比率を出してみると、前者が約二〇%であり、後者が約三〇%である。従つて従事者一人當りの生産額は前者が後者の二倍以上になる。この數字は零細製造業における勞働生産力の低さを物語つている。これら比較的大規模な製造業の多くは機械並に機械部品の製造業及び第一次金屬製造業であり、金物製造業の範疇には入らない。金物製造業及びそれに附屬する木工業の大部分は零細規模のものである。

金物製造業は事業所數では製造業全體の約四分の三を占めているが、従事者數ではその半分を少し越える部分を占めているにすぎない。この數字からして、先づ金物製造業がM市製造業においてもつている比重の大きさが理解される。

この他に金物に關連する製造業例えば金物に附屬する木工業等が相當な數にのぼる。これらの製造業を廣い意味における金物製造業に包攝することができる。従つて金物製造業を廣い意味に解すれば、その全製造業に對する比重は更に大くなる。従事者數の比率では六〇%以下に見積ることはできない。次に事業所數の比率と従事者數のそれとの差異からして、一般的に小規模なM市製造業のうちでも、金物製造業が特に零細なものを多く含んでいゝるといふことを推測しうる。金物關係の木工業は金物製造業に劣らず零細規模のものが多し。

M市製造業において、經營規模の零細なものが大部分を占めていゝという事實からして、従事者中家族従事者の占める比率が大であるといふことが容易に想像できる。業主を含む家族従事者が従事者總數の三分の一以上に當る。經營規模が小さくなるにつれて家族従事者の比率は大になるが、従事者三人以下のところではそれが實に九〇%になつてゐる。四人以上の規模では逆に家族従事者以外のものが九〇%近くを占めてゐる。しかし金物製造業に限つてみると、四人以上のところでも家族従事者の比率が尙一五%を越えてゐる。これは一〇人以上の規模のものが全製造業では七%近くあるのに、金物製造業ではそれが四%にすぎないといふ事實と關連してゐる。これらの數字からしても、金物製造業の零細性がうかがえる。かくて金物製造業での家族従事者の比率は、全製造業におけるそれを越えてゐる。小規模製造業には家事の傍ら作業の手傳をするものが一、二名いるのが普通である。これらは實質上の従事者であるにも拘らず、ここにあげた數字の中には含まれてゐない。これらを計上すれば、金物製造業では従事者の半分近くが家族従事者であると推定される。

更に注意しなければならぬのは、家族従事者以外の凡てのものが必ずしも嚴密な意味での賃銀労働者即ち近代的労働者ではないといふことである。これらのうちには相當數の徒弟が含まれてゐる。ここで徒弟といふのは將來獨立生産者として自營するために、現在職業を見習つてゐるものを指す。彼らは親方の監督の下に作業に従事してゐるが、近代的労働者の如く生涯被傭者たる地位に留まらうとするものではない。徒弟は將來獨立するための段階として現在職業教育を受けてゐるという事情からして、彼らの主要な關心は賃銀の額よりむしろ熟練の習得に結び付けられる。このことは徒弟をして極めて低廉な労働力の供給者たらしめる。徒弟制度はM金物製造業における長い傳統的慣習に基づき、若干の變容を蒙りながら現在にまで生き延びてゐる。M市製造業の中でも金物製造業において徒弟の數が相對的に多い。かくて金物製造業就中小規模なものの労働力は、殆んど家族従事者と徒弟とから構成されてゐる。家族従事者と徒弟とを低廉労働力の給源とすることによつて、零細金物製造業者は金物の機械的、工場的生産に對して強い抵抗力を發揮し、従つてこの業種の經營規模の擴大を阻害する役割を果たしてゐる。金物問屋についても程度の相異はあつても、上述したと略同様なことがいえる。

従事者から家族と徒弟とを除けば、残りのものは大體賃銀を主要な關心として雇傭されてゐるといえる。このやうな意味からして彼らを賃銀労働者と呼ぶことは可能である。しかし彼らの多くは所謂職人氣質の所有者であり、かつ自營の機會を窺つてゐるものが彼らのうちに相當に多い。このやうなものは金物製造業に優れてゐる。従つてM市金物製造業においても、又その製造業全體についても、近代的労働者の數はそんなに多くはない。しかもこれらのうち近在農村からの通勤者が相當に多い。かくてM市は工業都市とはいへないが、その住民の中に近代的労働者の姿を多く見出すことはできない。

M市の市街地には市内及び近在の消費者を相手とする小賣店が立ち並んでゐる。これはその他の地方都市と同じやうな風景である。この市街地で特に目を惹くのは多くの卸賣店の存在である。これら卸賣店の約四分の三は金物問屋

である。M市商業就業人口のうち約四分の一が、金物問屋の従事者であることからしても、金物問屋がM市商業活動のうちを占めている比重の大きさが分る。金物問屋の過半は従事者四人以下の小規模業者であり、従事者二〇人を越えるものは稀である。かかる小規模な金物問屋は家族と徒弟とを労働力の中樞として經營されている。この點について金物問屋は金物製造業と略共通な性格をもっている。

かくてM市の全世帯数の三分の一近くが、金物業によつて生計を立てている。このことからしてM市が「金物の町」である所以を理解しうる。かつM市は少くとも金物の町たる限り、又優れて「零細業者の町」でもある。

ここでは金物業に金物製造業と金物卸賣業とが包括されている。この他に市内及び近在の消費者を對象とする金物小賣業を擧げることができ、それらは取扱商品量においても到底金物卸賣業の比ではなく、一應無視されうる。金物製造業者は全國的市場を目標として生産しているが、彼らが製品を消費地へ直接販賣することは少い。製品の多くは市内問屋に持込まれ、その手を通して販賣される。M金物の約三分の二はこのように地元問屋を経由して販賣される。地元問屋を排除して、消費地と直結する能力をもつのは、相當規模の製造業者に限定される。壓倒的多數を占める零細製造業者は販賣の面において殆んど全面的に地元問屋に依存している。かかる機構の下では、製造業と問屋とは有機的に關連している。問屋との有機的關連において、零細製造業は問屋制家内工業的な性格をもっている。

以上においてM市金物業の現状について概観してきた。この金物業の盛大は最近の現象ではなくて、かなり古い歴史をもっている。以下では金物業における問屋制度をめぐつて、その成立、發展及び最近における解體への傾向ⅡM市産業の近代化への傾向Ⅲについて述べる。これらのうち特に解體への傾向Ⅱ現状の分析が本論文の中心課題になる。

二

Mに市制が施行されたのは昭和に入つてからである。最近も隣村を合併したが、町の時代にもMは明治三四年以降屢その隣接地帯を合併して、その地域を擴大してきた。従つてその時期以前におけるM町は、現在の繁華街を中心とする遙かに狭い地域を占めていたにすぎない。かつてのM町を問題にする場合には、このことを念頭に置かなくてはならない。しかしこの研究においては、行政的區畫について左程思い煩う必要はない。

(A)

三百年程前城下町でなくなつて以來明治三〇年頃に至るまで、M町は略純然たる商業都市として盛えてきた。この時代においても現在と同様に、M町の商業は單に地元及び近在を相手にするのみならず、より廣汎な活動領域をもっていた。當時においても、M町の産業が地元の武士階級の消費にではなく、遠融地との取引に基礎を置いていたといふことは注目すべきである。

この町の一端において、K平野を貫流するH川がその支流であるR川と相合する。この地理的條件を手掛りとして、M町はこの地方における物資集散の要地——商業的、金融的中心地になつた。船便を利用する關西、關東等への交通路がM町を基點として開かれていた。K平野は日本でも有數の穀倉であるが、この米を水路によつて關西へ運び、その歸便で呉服その他の雜貨を持つて来る。これはM町を基點とするこの地方と關西との當時における物資交流の典型的な一例である。移入された物資はM町で卸賣される。従つて街には諸々の種類の問屋が櫛の齒のように並んでいたが、それらの中でも特に際立つていたのは呉服問屋であつた。この問屋街にこの地方一帯の商人が集まつて來

て、商品の仕入を行つた。かくてM町は「問屋の町」であり、この地方の商權はM商人の手に握られ、この地方の取引はM町で決済された。問屋の町であつたということは、M商人の活動舞臺が廣かつたということの意味している。かかる環境のなかで「生馬の目を抜く」といわれる程商利に敏い町人氣質が培われた。この傳統は長く尾を曳いて現在の金物問屋のうちに流れ込んでいる。

鍛冶屋Ⅱカジは二百數十年前から、M町の近傍の農家の家計補助的職業として成立して来た。以下において、「カジ」は特にその主たる勞働力を家族或はそれと徒弟とに依存する零細な金物製造業乃至はその業者を指す名稱として使用される。當時農具カジは全國到る所にあつたが、それらの殆んど凡てが地元を越える廣域の需要に對應するものであつた。ところがM町及其の附近のカジの生産は、古くから地元を越える廣域の需要に對應するものであつた。この對應を可能にした要因の主なるものとして、次の二つを挙げることができる。それらの一つは廣域を舞臺とするM商人の活躍である。他の一つは河川に沿うが故に、洪水禍を免れることができなかった沿岸農民の困窮である。この困窮が家計補助的職業としてのカジをこの地域に發生せしめた。

廣域を市場對象とするカジは先づ家釘の製造に始まつた。當初においてはR川上流に産する木炭とこの地方の屑鐵との結合により、農家の副業として拳大の屑鐵から一握の家釘を作り出すという形で、生産が行われた。この技術は年期入りの苦勞をせずとも、一寸器用な人ならできる程度のものであつた。其後次第に製造品目が増加して、農具をはじめ雑多な小金物が含まれるようになる。カジは漸次高度な熟練を必要とするに至る。この熟練習得のために、徒弟制度がとり入れられるようになる。それと同時に、專業のカジが出てくる。この經過において當然金物の生産量が増加し、原料は最早この地方のものだけでは間に合わなくなる。かくて例えば關西からの歸便を利用して、出雲の

地金を取り寄せるという方策がとられた。

この金物業は市場の開拓、原料の移入についてのM商人の活動を俟つて盛大となつたという事情からして、カジは最初から問屋制家内工業という形態をとつていたようである。金物はM町内よりむしろ近在農村で製造されることが多かつたが、これらのカジを支配する問屋はM商人の手に獨占されていた。M町から若干の距離を隔てている地域で製造される釘を、M商人を経由せずに、江戸へ積出そうとする計畫がその土地の有力者によつて企てられたことがあつた。しかしこの計畫はM商人の干渉によつて挫折せしめられた。この事實は當時におけるM商人の實力がいかに大であつたかを如實に示している。

かかる金物業の漸次的發展にも拘らず、少くとも明治三〇年頃までは、この業種はM町の主要産業にはならなかつた。金物販賣は大問屋の副業として、又は小問屋によつて營まれるにすぎない状態であつた。取扱われる金物の種類が少いのみではなく、その販路も現在よりも遙かに狭かつた。

〔B〕

明治三〇年までは、この地方は水路を殆んど唯一の交通路として關西、關東等と交易をして来た。しかしその時期に、この地方に鐵道が敷設されると、交通路は水路から鐵路に移つた。これによつて河港を産業の立地條件としていたM商人は致命的な打撃を受けたかにみえた。この地方の物資の集散は最早Mを中心とする必要はなくなり、Mの商業的霸權はその手から落ちた。

この難局からの脱路は地元での製造業の育成とそれに基づく商業的活動に求められた。かつて殆んど純然たる商都であつたところに、各種の製造業が芽を延ばしていつた。これらのうち主なもの足袋、染色、金物の三製造業であ

つた。始め足袋、染色は金物に匹敵し、或はそれを凌駕して延びてきた。しかしやがてこれらの生産に機械化、工場化が適用されてくるにつれて漸次没落して、金物のみが現在に至るまでその強い生命力を實證している。この町の多くの人々が生産技術の遅れた業種によつて生活の糧を求めなければならぬということは、この町を工場化以前の零細製造業者の町としている。

明治三〇年以後の金物業の急速な發展にイニシヤティブをとつたのは矢張商人であつた。全國を股にかける健脚に疲れを知らぬ商人たるM商人の勤勉は、新興の金物問屋に繼承されて、その五體に脈うつていた。M商人はいざり商人ではなく、脚にもものいわせてあらゆる障害を克服して、邊境にまで販路を開拓しようと努めた。かつて北海道の北端にある禮文島にいつたM金物問屋が、自分がこの島に來た最初のM商人だつたと思つた。ところが既にその前に二度もM商人がそこへ來たという話を聞かされた。

販路の開拓だけではなく、問屋は各地を行商する折に先進地の優秀製品を持歸り、カジにそれを模倣させて類似品乃至はその改良品を作らせた。かくて逐年増加する取扱商品をもつて、益々新市場を開拓しようと努力した。問屋としてはおよそ取引先に賣りうるあらゆる商品をもつての方が商賣上有利である。この賣りうるあらゆる商品が殆んど地元で生産されうるということが、他の金物の町に比べてのM市の特色の一つになつてゐる。この町の金物の種類が極めて多く、千を以て數えられるということは商人の商賣熱心に負うところが大である。徳川時代からの傳統を擔つてゐる問屋の勤勉と商才、それに加えるにカジによる低廉かつ豊富な労働力の供給が、金物業の立地條件からして、さのみ有利とはいえないこの町に金物業の盛大を來たした大きな理由として擧げられる。

金物業の興隆につれて、町のメイン・ストリートの兩側が金物問屋によつて占められるようになった。それらの場

所の幾つかには、かつて呉服問屋があつた。従前においては二流の商人であつた金物問屋が、一流の呉服問屋にとつて代り、町の實力者となつていつた。この過程においてかつての一流問屋II町の旦那衆は格子戸を閉めて利子生活者になり、そして次第にその影を薄くしていつた。明治三〇年の交通革命を契機とする産業の再編成の過程において町の勢力の交替を幾つか見出すことができる。しかしそれらは問屋が町の經濟生活の實權を握るといふ根本性格を變えるものではなかつた。Mは依然として問屋の町であり、Mの主要産業は問屋の主導によつてより大きな社會へ適合されてゐた。しかし町の風景は變つてきた。今まで町の片隅にあつて目立たなかつたカジがこの時期を境として急激に數を増し、路地に沿つて密集したカジの小さな家屋、町の周邊を圍むカジの作業場が顯著な光景となつてきた。Mは問屋の町であると同時に「カジの町」にもなつた。支配する問屋と隷屬するカジII問屋制度が、この町の産業組織を特徴づけてゐる。獨立小生産者は生産手段を彼らの手から剝奪されることなく、強固な問屋制度の下に資本の手に任ねられた。商業資本から産業資本への轉換の萌が目につくようになったのは極く最近のことである。

(C)

少くとも昭和初期までのM金物業の産業組織は典型的な問屋制度であつた。問屋とカジは支配—隷屬の強固な絆で結び付けられて、一つの統一體II金物業を構成してゐた。

當時M金物製造業において工場組織をもつものは殆んど皆無であり、カジII問屋制家内工業的零細經營以外のものを見出すことは困難であつた。近代工場制度では、熟練は並列する機械と分業の精巧な機構との中に吸収される。そこでは仕事は労働者に熟練を發揮する機會を與えていないのが普通である。ところがカジでは道具が主要な労働手段であり、二人程度の従事者では分業の餘地も少い。生産過程が機械化されず、仕事が専門的に分化してはいないか

ら、一人前の職人は道具で、しかも各種の工程を遂行する能力を要求される。このような熟練は、子相傳的に又は徒弟制度によつて習得される。

Mは「スクラップの處理工場」と呼ばれる程で、屑鐵がMに入り、製品がそこから出て行く。安價な製品を作るためのこの條件は、劃一的な操業に機械の導入を阻止して、熟練を生産の不可欠な要素たらしめる。質の不均一な屑鐵を素材として例えば双物を製造する場合には、先づ鐵の質を鑑別することが必要であり、更に夫々の材質に適當した熟度で處理しなくてはならぬ。作業は夫々の場合に應じて、個性をもっている。これらの操作はすべて「カン」によつて行われる。關西のY町はこと同じく金物の町として有名であるが、ここでは古鐵ではなくて新鐵が素材として使用されている。この場合には材質が均一であるから、劃一的處理が可能であり、機械的生産への道が開かれている。従つて又同一規格の製品の大量生産という結果が出てくる。Y町では製品の種類がMに比べて遙かに少く、少い種類の製品の大量生産が行われている。規格について厳しい輸出の面ではM金物はY金物に太刀打ができない。かくてM金物は販路を國內の雑多な需要に求めざるをえない。

粗悪な原料と劣等な生産設備で、しかも製品の低廉が賣物である場合には、多少の熟練を以てしても品質の低下を防ぐことは難しい。これに加えるに、手工業特有な製品の外貌の不體裁がその商品價値を不當にまで引き下げる。關西問屋がM金物を仕入れた場合、M産物であることを表示するマークが入っていると安くしか賣れないので、自分のところのマークを入れて、關西製品を装うことがあるという。

カジは手工業的零細經營であり、その開業に際して僅かの資金で事足りる。しかしカジを始めるためには熟練が必要である。これらの二つの要因を基礎として、Mカジに徒弟制度が確立された。徒弟は小學校卒業又は中退で親方の

家へ住込み、大體徴兵適齡までの期間、盆暮の小遣程度の他は金銭的報酬がなく、衣食を支給されるだけで働く。徒弟は家族と並んで低廉労働力の給源となると同時に零細經營を擴大的に再生産する。

徒弟制度は經營内部において親方と徒弟という階層關係を成立せしめるが、この關係は近代的勞資關係とは本質的に異なる。勞資關係は經營内部に階層化が存在するのみならず、そこで階層的昇進が不可能になつた場合に始めて成立する。垂直的に積み重ねられている階層相互の間の移動が阻まれると、労働者は一生その地位に留まることを餘儀なされる。成程徒弟はその労働力のみをもつて、親方の經營に参加する。しかし彼は年期を経て、熟練を獲得するにつれて階層的階段を昇り、親方になることができる。徒弟にとつて親方は將來の自分であり、親方にとつて徒弟は過去の自分である。そこには親方と徒弟とを隔絶させる封鎖的な階層關係はない。従つてここでは近代的勞資關係が内包している階層關係の封鎖性に基づく階級對立の契機はありえない。徒弟は個人的努力によつて自らの社會的地位を高めることができる。従つて近代労働者の如く組合を結成して、團結の力によつて社會的地位の向上を圖る必要がない。

カジを開業するには大した資金の必要もなく、かつ親方になることについてのギルド的制約もないから、徒弟は熟練を習得しさえすれば開業するための大した障害はない。しかもカジの職人の給料が極めて低額であるから、一人前の職人たる熟練をもつていて、被傭者たる地位に甘んずるものは殆んどない。獨立した徒弟は昨日の親方との間に恩義的な關係はあるにしても、經濟的には同一の條件で彼と相並んで競争することができる。かくて徒弟制度はカジの數を年々増加せしめる。カジは概して孤立的性格が強く、彼等の間に團結の強い組織が缺けている。これによつてカジ仲間の競争は激化される。このことは問屋との關係において、カジを不利な状況に追い込む。この結果長時間のしかも辛苦な労働とそれに報いることの少い低収入とがカジに纏いつく。労働時間は一五、六時間が普通である。傭を

吹き、金床を叩き始めると、殆んど前屈みになり通じであるという作業のため、カジの體が曲つていたという程である。それにも拘らず、カジの収入は町の職人中最低位に近く、低い生活水準を餘儀なくされていた。しかしこの低収入に低廉労働力の供給は資本主義的機械生産の壓力に消極的ながら抵抗して、M金物業の盛大を齎らす楨杆となつた。

問屋にもカジにおけると同じような徒弟制度があつた。しかし年期奉公の完了をまつて行われる階層的昇進について兩者の間には難易の相異があつた。カジは殆んど資金を必要とせずに関業しうが、問屋を始める場合には相當の資金が必要となる。従つて資金の借用、品物の融通等について主人から便宜を計つて貰う必要が生じてくる。このような場合には獨立するという事は主人と對等な地位に就くということを必ずしも意味しない。獨立は容易ではないが、しかし不可能ではない。問屋の徒弟は獨立しうるといふ希望をもつて勤めている。かつ一人前の番頭でも昭和の初期で月收三〇圓程度であるから、經濟的見地からしても獨立した方が有利である。この町の有力問屋についてみると、この店の出身者でこの町及び他の土地で問屋をやつてゐるものが二〇人ばかりいるという。問屋を開業するには資金が必要であるから、或る程度の資金の融通のつく見込のあるものが小僧として入つてくる。更に小僧は読み、書き、算盤ができなくてはならないが、カジの番子は小學校中退でも間に合う。これらの事情からして小僧と番子は同じように徒弟であるが、出身の階層が若干異つてくる。

前述のように問屋とカジの各の經營内部においては、徒弟制度が勞資關係の成立を拒んでいる。しかし兩者相互の間には事實上の勞資關係が形成されている。問屋制度は家内工業的零細經營を基盤とする時強化されるが、この強固な形態においては問屋と製造業者との關係は對等の賣買關係以上の産業的な階層關係が含まれている。しかも問屋とカ

ジとの間の職業的移動乃至は垂直的移動が行われることは皆無に近い。かかる問屋に對するカジの賃銀労働者の隷屬を導く要因として、問屋の資力が大きな役割を果していることはいうまでもない。これと共にこの資力に抵抗するためのカジの横の結合の缺如をも無視してはならない。明治末にカジが彼らの社會的地位の向上を目指して、自分達の間だけで多分にギルド的色彩をもつ鍛工組合を結成しようとした。これは問屋の壓力に對抗するための組織であるが故に、この計畫は當然問屋側からの激しい阻害運動に直面した。かくてこの計畫は水泡に歸し、その代りに兩者を一丸として同業組合が結成された。この組合の指導は自づから問屋の手に落ちた。

カジが何らのギルド的組織すらもつていないということは、カジ以外に生活の道を見出しえない多數の人々の存在と絡み合つて、カジの濫立を不可避的にした。これに對して問屋の數は開業の困難によりある程度制限されていた。かかる兩者の數の不均衡は兩者の競合においてカジを不利な状態に置く。問屋はカジの間の競争を利用して安價な仕入を行い、多額の利潤を生み出すことができた。これによつて蓄積された資本を背景として、行商地の勘定は年に三、四回程度回収するにすぎないが、カジが持つて來たものは即金で引取ることが問屋にとつて可能となつた。

カジのその日暮しからして、不時の用が生じた時には、彼は問屋に頼るようになる。更に前金を貰い又は材料を支給されるというものが出てくる。カジは自分の作業場で、自己の労働手段を以て、生産する獨立生産者であるから、理論的にはどの問屋とも取引しうる筈である。しかしこのような關係ができてくると、その自由を失い、特定の問屋にのみ販賣しなければならなくなる。かくて專屬關係が生ずる。專屬制度は問屋の競争を利用して、カジがその製品の價格を引上げることが不可能にする。しかし問屋に對してカジが過剰である場合には、問屋の競争を利用することより、むしろ專屬關係を結ぶことによつて自己を他の同業者の競争から守ることが、カジにとつて焦眉の問題となる。

従つて専屬になるといふことは少くとも個々のカジにとつては有利でさえある。かつて問屋は小さいものでも、このような専屬のカジを七、八軒もつていた。

専屬になると、カジはその製品を取引先の問屋に持つて行きさえすれば、何時でも即金で買つて貰える。カジは朝早くから仕事を始め、夜晩くそれを終ると、直ぐにその日の製品を問屋に持込む。そして金を受取つて、歸りに米と原料を買つて行く。このような文字通りのその日暮しの生活が繰返される。このカジと彼の來るのを待つてゐる問屋の中、小僧が何時も町の風呂屋の落し湯の客であつたという。製品を持つて行きさえすれば、何時でも金が入るといふことが、夜越しの金は使わぬという習性をカジに植へつける。又カジは貯蓄する餘裕を興えられていなかつたといふことも事實である。兎も角この習性がカジの發展を妨げ、その零細性を永遠化し、従つて問屋の支配を安固たらしめる基盤となる。カジのその日暮しを利用しての買いたたきは、問屋に大きな利潤を保證する。藏の中にその製品があり、又直ぐ賣れる見込がなくても、問屋はカジの持込んだ製品を買取る。それでも採算がとれるのは餘程安く買うからである。問屋は米屋の勘定は後廻しにしても、カジの勘定は支拂うというやり方をとる。それ程それは有利な取引であつた。

専屬制度の下ではカジの収入は最低生活の線にまで壓縮される。しかし反面においては、この線を基準として、問屋はカジの生活の保障をなしていることになる。カジの製品は安くしか賣れないが、しかし全く賣れないということはない。問屋はいかなる場合でも、専屬カジの買手となつてくれる。しかしその買値についてとやかくいふ發言權はカジには興えられていない。この生活保障の代償として問屋に對するカジの身分的隷屬が生れてくる。カジと問屋との間には單なる賣買關係を越える身分的關係が入つてくる。問屋は葬式等の時に、人夫を他から頼んでくる必要はな

かつた。専屬のカジが人夫として使つてくれといつてきた。問屋はこのようなカジの忠勤を色々な手段で獎勵する。例えば一〇年以上に亘る専屬としての勤続者には所謂出入として親族待遇を興えるといつた方策が採られる。この親族待遇はいうまでもなく奉公人分家的な隷屬の要素を含んでゐる。農村における地主、小作關係が、形を變えてはいらぬが、問屋、カジ關係のうちに複寫されている。これはこの町を取巻いてゐる農村的雰圍氣に合致するものである。

カジの市場からの完全なる隔離はかかる問屋支配の體制を一層強固なものとする。カジの製品の多くは小農、大工の道具或は家庭用器具であるが、これらは需要される地域の特種性によつて、異つた型のものが要求される。例えば鎌にしても柄木型、茨城型というような區別があり、庖丁にしても處によつて異つた型のものが使用される。このことはこれらの製品生産への機械化、工場化の適用を阻み、零細業者による生産の殘存を可能にする。それと共にこれは全國の何處でどのような品を使つてゐるかを知ることが、問屋の商賣上の鍵とさせる。かかる市場知識をカジに期待することはできない。カジは自分の製品が何處でどの位の價格で賣られてゐるかを知ることが困難である。かくてカジは市場から隔離され、いかなる製品をどの位の數量生産するかは全く問屋の指示による。更にカジは製品を裸のまま問屋へ持つて行くことが多い。これらの製品は家内工業の特色として規格がまちまちである。これらを格付けして、一定の商標を付けるのは問屋の手で行われる。又磨きをかけて外観を整え、かつ包装するのも問屋の仕事である。生産の末端は問屋が引受けてゐる。従つて問屋の手で始めて商品としての形態が整備される。これはカジの消費地との直結を全く不可能とし、問屋への隷屬を促進する。

カジの賃銀労働者の隷屬は前期的様相を帯びており、經濟的利害對立の意識は潜在化する。カジの問屋への抵抗を不可能にするような精神的雰圍氣が醸し出されてゐる。この狀況からして問屋の富裕とカジの貧困との顯著な對照が

出てくる。問屋は町の實力者であり、カジは町の最下層をなしている。ろくでもないものは「カジになれ」といわれ、「カジにするぞ」といつて子供をおどかす。カジが鼻の頭を黒くしているのを揶揄している「鼻黒黧」という言葉が彼らの社會的地位を表象していた。

三

専屬制度はカジの間屋への身分的隷屬を内容とする、嚴密な意味における問屋制度の支柱となつていた。昭和初頭の深刻なる不況により、専屬制度に嚴密な意味における問屋制度は次第に解體し始めた。不況による販路の杜絶、在庫品の値下りに伴つて、問屋は買入價格を引き下げた。ところがカジは單價の低落を時間延長と勞働強化によつて補おうとして、益々多くの製品を問屋に持込んだ。問屋は彼らを専屬としているが故に、不必要な品物をも買わなければならぬということに耐えられなくなつてきた。他方、カジは専屬なるが故に、他の有利な販路を斷念しなければならぬことを苦痛に感じ始めた。かくて専屬制度の中に含まれている生活保障の制度が、兩者にとつて桎梏化して行く。専屬制度の崩壊は從來の親方、子方的紐帶の解體であり、それと共にかつてはその下に隠れていた兩者の經濟的對立が意識されるようになる。假令前貸關係が残存していても、それが單なる純經濟的關係として意識されるようになる。かくてカジの間屋に對する反撥の感情が露骨になつてきた。しかもそれが勞資的對立に近い感情として現れる。

専屬制度の解體によつて、カジが何處へでも賣れるようになったということは、一方では小さな問屋の成立する餘地を生ぜしめた。問屋を始めるにはかつてのようにな大きな資金を必ずしも必要としなくなつた。他方ではカジが消費

地と直接取引をする可能性が開かれた。消費地と直結しうる金物製造業者の多くは、實はカジを脱皮して、工場組織を採用して、「金物工場」として成長してきたものである。一般のカジはこのような直結をなす能力を殆んどもつていない。金物工場は徒弟以外に幾人かの職人を使用する。従つてそこには勞資關係の萌芽がぎざぎざしている。金物工場の出現によつて、最早金物製造業の凡てをカジという一つの範疇に押し込むことはできなくなる。このことは裏返しにすれば、問屋が金物業の絶對的支配權を握ることが困難となつたといふことを意味している。この傾向は昭和一二、三年頃までは緩慢にしか進まなかつたが、戦時を経過して戦後となると、はつきりした形で現れてきた。

戦時中における中間商人の排除によつて、問屋の活動範圍が制限されたが、製造業はこの間に延びてきた。更に從來の間屋は戦争直後のブームに乗るのに機敏ではなかつたが、製造業はこれによつて一層膨れた。製造業の膨脹と問屋の收縮は問屋制度の本來の立脚地を切り崩していつた。製造業者の零細性を基礎として問屋は産業の指導者となることができる。従つてカジから金物工場が成長してくる過程は問屋制度の解體乃至は弱體化の過程でもある。問屋は最早金物業の主導權を握ることが困難となり、過去の盛大が夢となり、次第に縮んでくるかにみえた。

兩者の勢力の逆轉は色々な面に現れてくる。例えばこの逆轉は銀行・信用金庫等の金融機關の利用の面にも如實に反映されている。かつて製造業者はその零細性の故に、これらの金融機關の顧客になれなかつた。又その必要もなかつた。何故ならばかつては彼らの金融の面倒は問屋がみてくれた。例えば冬賣る火箸を問屋が秋に現金で買つてくれる。しかし今や問屋は衰頹し、このような面倒をみる實力がなくなつた。その反面製造業者は規模を擴大して、金融機關の信用授與の對象となりうるまでに成長してきた。戦後金融機關を利用しては金物工場の數は少くないのみではなく、その取引額は屢問屋のそれを凌駕している。かくて金融面からしても問屋の製造業者に對する命令權は弱ま

つてきた。實力の交替は單に經濟面に限られず、その他の社會的面にも現れてきている。例えばかつては役場の吏員になるのさえ困難であつた製造業者の中から、現在では數名の市會議員が出ている。金物製造業者の社會的地位は向上し、「鼻黒駒」という言葉はかつての思い出としてのみ残っている。

・製造業をそれと問屋との關係の相異に重點を置いて分類すると、近代工場、金物工場及びカジという三つの型が指摘される。これらの夫々にふれながら、問屋制度の解體への傾向という事態を明らかにしよう。

戦前においては町の産業構造に大した影響を與えることのなかつた業種が戦時中に芽生え、戦後においては町の産業において相當な比重をもつようになつてきた。この製造業の製品は金屬製品であるという點では金物と共通している。しかしM市の特産物としての金物とは異つた性格をもっている。この製品は近代的工場生産に適しており、カジからの競争を全く排除する。更にこの業種は地元問屋と何らの直接的關係をも、もたない。この製造業を「近代工場」と呼ぶことにする。近代工場は從來のM市の産業構造にとつて異質的であり、その發展はM市に産業革命をまき起す。本論文はM市の金物業を主題としているから、近代工場は直接の對象とはならない筈である。しかしそれが金物業に與える間接的影響の大きさの故に、敢て近代工場について若干の紙數を割く。

近代工場が問屋制度に對して外部から壓力を加えるが、金物工場は内部からその解體を導く作用をする。金物工場は戦前においても見られないことはなかつたが、戦後では輕視しえない大きな力となつた。この工場は問屋と製造業者との勢力を逆轉せしめることによつて問屋制度を弱體化せしめると共に、消費地問屋との直結によつて地元問屋を排除しようとする。この経過は地元問屋の取扱う金物の數量が絶對的には鬼も角、相對的には減少してきているという傾向に現れている。

第三のカジについてはこれまで相當詳しくふれてきているので、以下においては近代工場と金物工場との論述に重點が置かれる。製造業の變化に伴う問屋の變貌が最後にふれられる。

〔A〕

近代工場の製品としては、例えば機械、機械部品、全國的な標準規格をもつ工具が擧げられる。これらは所謂金物とは型の異つた新型製品であるのみではなく、その生産方法も異なる。即ち新型製品は機械化された生産過程の所産である。ここで「機械化」というのは相當額の固定資本を必要とする形での機械の導入による生産の合理化を意味する。この機械化は一つの屋根の下での多數の人々の協働即ち家庭と作業場との分離を必然化する。水力の形における非人間的エネルギーの利用と結合した力織機の導入が集中化されない問屋制家内工業を陳腐なものとした——あの劃期的な光景を、近代工場はM市に現出させる力を藏している。近代工場はかつてのMには缺けていたものである。それが金物製造に適用されるならば、M市の社會生活を前期的に色彩づけていたところの技術の前期性¹¹家内工業的生産方法は克服される。しかし近代工場は金物においてではなく、新型製品の面において主に展開された。金物製造の領域における工場の近代化は絶無ではないが、そう自立つてはいない。従つて近代工場は問屋制度を直接的・内部的に解體せしめはしない。しかしそれはそれに對して間接的に外部から強い壓力を加えうるものである。M市におけるこの種の工場の經營規模は大體數十人から二百人程までの間に分布している。従つてこれらの工場の規模は大であるとは決していえない。大工場の下請工場的な規模しかもつていない。しかし今後における發展はM市の産業構造に革命的な影響を與える。二〇世紀も半ばを過ぎた時に、M市に産業革命の烽火が、まだそう大きな光彩を發してはいないが、たちのぼっている。

戦後の二、三年間はM市の金物業に空前のブームが起つた。その當時には賃銀労働者よりもカジの方が遙かに収入がよかつた。従つて経済的利害關心からしても、賃銀労働者たる地位に甘んずるよりカジを自營した方が有利であつた。しかもこれを側面から助長する風習がM市に残つてゐる。この町では従來からの傳統によつて、辨當をもつて通勤するということ¹¹「辨當もち」即ち賃銀労働者を輕蔑する傾向がある。一人前になれば當然獨立するものと期待されてゐた。この傳統はかつてのMにおいては、それ自體経済的利害と並行するものであつた。熟練を習得して、一人前になつたものは職人として備われるよりも、自營した方が収入がよかつた。このような事情からして、折角工場で工員を養成しても、一人前になると、そこを出て獨立してしまふ。このことは工場の經營者の頭痛の種であつた。これを回避するために、工員を採用する際、M市の人を意識的に避けて、近在の農村の人を採用しようとする工場經營者すらあつた。工場通勤者に比較的汽車通勤者が多い原因の一部はここに求められるようだ。しかし大資本に有利な體制が再建されてくると、経済的困難は前期的な中小規模の産業に皺よせされる。原料安の製品高によつて、製品原價中原料費の占める比率が大きくなつてくる。しかもこの間屋は元來孤立的・自由競争的意識が強いものにつけ加えて、戦後における間屋の濫立は益々製品安の傾向を促進する。これが結局、抵抗力の弱いカジに轉嫁される。かくてカジの収入と工場労働者の賃銀との比率が逆轉してくる。工場労働者の方がカジよりもむしろ収入がよくなり、かつ前者の方が安定性がある。最近二、三年間工場を止めて、獨立するものが殆んどなくなつたのは、これが大きな原因をなしている。かつては工員の募集が困難であつたが、現在では志願者が採用者を超過してゐる。賃銀労働者への誘因が助長され、それになる機會が擴大されるならば、カジの賃銀労働者への轉化、徒弟の減少という現象が出てくる。かくて間屋制度はその基礎づけたる家内工業という形での低廉労働力を喪失して、解體を強制される筈である。

しかしこの傾向が果してM市で急激に押し進められるかどうかは疑問である。

次に現存のM市近代工場の若干の事例について、それらがいかなる過程を通じて設立されたかに重點を置いてみる。

先づこの町での最大の工場である煙草巻機械を作つてゐる工場についてみる。この工場は當初からこのようなものとして設立されたのではない。この工場が現在のような性格をもつに至つたのは意圖されていなかつた結果であるといふことが注目されなくてはならない。戦時中は、資材統制と消費規制によつて平和産業が抑壓された。この情勢に鑑みて、M市金物業者も製造種目の轉換を痛感して、軍需品への切替を計畫して、工業組合を結成した。製造業者が零細であり、機械的設備に缺けてゐることがこの切替を困難にした。この困難を克服するために生産の機械化された過程の遂行を目的として、政府の補助によつて工業組合連合會の共同施設工場が昭和一四年に設立された。これがこの工場の濫觴である。ところが後になつて、何もわざわざ製造種目を變えなくても、従來の製品たる金物がそのまま軍需の對象となることがわかつた。そのためこの工場は組合員から見放されて、獨立採算制をとるのやむなきに至つた。かくてこの工場は某大鐵工所の下請工場として、金物とは性格の異なる機械即ち旋盤を製造した。昭和一七年には、親工場がその株式の半分を引受けるという形で、五〇萬圓の株式會社として再發足した。戦時中旋盤を製造して、相當な技術をもつに至つたこの工場は、終戦と共に親工場の手から離れて獨立企業となつた。かくて三轉して、專賣局の直接注文を受けて、煙草巻機械工場として操業し始め、現在に及んでゐる。現在資本金一千萬圓で、年産額二億圓である。この年産額はM市の製造業全體のそのの一割を越えてゐる。この比率からしても、この工場がM市産業に及ぼす影響を過少視することはできない。その資本金の大部分は地元外から調達されており、又重役の大部がM

市の人ではない。これは地元的性格の強いM市産業の中で、この工場を異彩たらしめている。従業員は約二百名であり、汽車通勤のものが多く、従つて従業員もM市以外の人が多いことになる。

次に工場誘致の稀な例として主にモンキーレンチを作っている工場を挙げる事ができる。この工場は昭和一三年に、某飛行機工場の下請工場として資本金五〇萬圓で發足した。この工場は發足當時から地元産業とは何らの有機的關係がなかつた。この製品は比較的單純なものであるが、それはカシが最も苦手とする嚴密な規格を要求されている。その販賣は全国各地に置かれていた代理店網を通して行われる。従つてその販賣の面に、地元問屋が介入する餘地は殆んどない。工程は幾つかの部門に分れており、各部門に職長がいる。職長以外の工員の仕事は殆んど熟練を必要としない。従業員約七〇人のうち、相當数がここでも汽車で通勤している。

前述した二つにおいては、それらの経営主脳部にM市の人々が位置していない。しかし近代工場の中でも地元の人によつて經營されているものが幾つかある。これらの多くはかつての小規模な經營から成長してきた。M市の主たる商工業は金物業であるが、金物業では或程度以上の規模の經營は經濟的に引合ぬものになる。工場が低廉労働力を武器とする家内工業からの競争に打勝つためには、生産の機械化が必要である。ところが金物の多くは機械化された生産を困難ならしむる性格をもつてゐる。製品自體が技術的にみて、機械的生産を困難にするのみではなくて、その需要が多種多様であるために、同一規格のもの的大量生産を不可能にする。かくて金物以外の品種の製造に轉換することなくしては、經營規模を擴大しえないという事情が出てくる。このような品種として、輸出とも結合するミシン部品、或程度の精密性を要求される農業機具等が選擇されている。金物問屋も一定の限界以上に經營規模を擴大すると採算がとれなくなる。地元業者は大きくなると金物以外の領域に移つていくといわれている。實はかかる移行なくし

ては、より以上の發展が望めないのである。かくて近代化は地元外の力によつて促進されると同時に、地元内においても近代化の擔當者が出てきてゐる。

問屋制度が事實上の勞資關係を含んでいるということは既に指摘した。しかし問屋制度においては、小生産者は形式的には商品を賣るのであつて、勞務を提供するのではない。ところが工場制度が採用されると、勞資關係は外形的にもはつきりと現われる。問屋制度はこの外形的現象を伴わないから、そこでは資本から自由であるという幻影が胚胎し、前期的殘滓を帯びた小生産者意識が固執される。従つて勞資の對立を直視する眼は曇つてゐる。しかし工場制度の到來はこの幻影を消失させる。

工場の前期的段階即ちマニファクチャアの段階では生産の機械化は未だ進行せず、仕事は依然として労働者の熟練を要求する。熟練を武器として労働者は資本に個人的にも對抗する餘地があつた。ところが機械の導入即ち工場の近代化と共に、仕事は最早熟練を要求しなくなる。近代工場では労働者は熟練という武器を奪われたのに反して、資本家は増大せる固定資本を背景にしてその力を強化している。更に産業豫備軍の存在は絶えず現役の労働者の地位を脅かす。労働者は自由競争場裡においては、資本に對して劣者たる地位を甘受せざるをえなくなる。個人的抵抗の無力を覺ると同時に、近代的階級意識が芽生えた。かくて労働者は自らの社會的地位の向上を目指して、組合を結成して、團結の力を以て資本に抵抗するようになる。

M市において、このような近代的労働者意識を生ぜしめる客觀的基盤が育成されているが、それにも拘らずこの意識が低調である。組合による労働者としての権利の主張が不活潑である。町を包んでいる前期的雰圍氣、周邊の農村的環境が意識の近代化を阻んでいる。M市最大の工場においてすら、組合が結成されていないで、勞資の協議會が單

に經營者の諮問機關として存在するにすぎない。しかもこの協議會に参加する労働者が職長級であるという事は、その性格の若干を暗示している。組合が結成されている工場でも、ストライキという手段が採られたことは絶無に近い。この意味においてM市は資本にとつての樂天地である。

〔B〕

前述によつて理解される如く、製品の種類がその生産の型に影響を及ぼす。金物問屋の商品目録に登載されている所謂金物の中にも、工場生産が比較的有利なものとそうでないものがある。例えば、戸車は前者に、刃物は後者に屬する。その製品が兩者のいづれであるかによつて、金物工場を二つに分類しよう。第一の型の金物工場は近代工場に近い性格をもち、第二の型のそれはカジに近い性格をもつていえる。他の分類についてもいえるが、この場合にもいづれに屬するか判定の困難なものが分類の境界線においては存在する。いうまでもないことだが、金物工場の多くは第一の型のものであり、そこにおいてこそ工場生産が多くの成果を収めることができる。第二の型の工場は第一の型のものに比べれば、その數も少く、その規模も小さいが、これを問題にすることによつてM金物製造業の本質にふれることができる。

金物工場の壓倒的多數はマニユ的生产方法に立脚しているという點に、兩者の共通性が求められる。かつ一般的に前述の近代工場よりも小規模であり、大體十數人乃至數十人の従業員によつて生産が行われている。ここで「マニユ的」というのは、これらの工場において機械の使用が全く缺けていという意味ではない。カジの作業場においてさえ簡単なものではあるが、機械の若干を見出せる場合が多い。それにも拘らずマニユ的として特徴づけるのは、そこで使用されている機械が、それに體化されている固定資本の重みをもつて、カジに零細製造業を全面的に壓倒し去る程

の強度の力をもつていないからである。従つて金物工場は少くともカジとの競争に直面する可能性をもつている。この競争における兩者の力關係からして、金物工場の型が二つに區別されるのである。

第一の型の金物工場として某戸車工場をみてみる。この工場は鑄物、機械及び組立の三つの製造部門から成り立っており、七、八〇人の従業員をもつている。鑄物部門は熟練を必要とするが、その他の部門は殆んど單純労働で事足りる。特に組立部門は主に女子が擔當している。鑄物部門以外では労働者の移動が激しいが、その部門では徒弟上りの長期勤続者が多い。鑄物労働者にはこの工場での最高給料が與えられており、かつ雇主が結婚等についても世話をみているから、兩者の間に個人的親密關係がある。このようにして基幹的労働力の確保が計られる。戸車の生産過程は概して單純であり、製品價格中原料費の占める比率が非常に大きい。經營者は加工費の高い機械部品の製造に轉換したい希望をもつてゐる。金物工場から近代工場への移行がうかがわれるのは稀ではない。この工場は戸車の需要が緩慢である時には、農器具を生産する。この農器具の殆んどが農業協同組合に直接販賣される。

戸車はカジによつても生産される。しかし戸車カジは供給を上廻る需要によつて戸車の價格が騰貴した場合のみ採算がとれる。通常の状態では戸車カジは戸車工場に對抗しえない。戸車工場は戸車カジとの競争に比較的容易に打ち勝ちうるという點で、第二の型の金物工場と異なる。しかしそれは戸車カジを全面的に排除しえないという點では、近代工場と區別される。

第二型の金物工場はカジとの競争に耐えることが困難である。従つて不況の場合には、近代化と反対な方向即ち工場のカジへの轉落という現象が展開される可能性がある。金物工場の型の相異は前述の如くその製品の型から出てくる面が多い。刃物例えば鋸、鉋、庖丁、小刀等には所謂名工と稱せられるものが現在でもM市にいる。多少の機械

を以てしても、双物製造という仕事から熟練の介入を排除することはできない。仕事が熟練を要求するということが、所謂名工の出でくる理由である。この點において双物は戸車と異つた性格をもっている。M市の双物製造では末だ機械より熟練の方が大きな發言權をもっているようだ。従つて双物工場が双物カジに加える壓力をそう大きく評價するのは危険である。むしろ逆に、双物カジが双物工場に壓力を加えているとみることさえできる。双物工場の困難は對外的な面即ち双物カジとの關係においてのみ生ずるのではない。それは對内的にも一つの困難な問題をもっている。双物カジの双物工場に對する抵抗力からみて、双物工場の熟練労働者が小生産者に轉換することはそう難しいことではない。彼らが熟練を以て資本に對抗しようということ、更に獨立の機會を狙つていゝことは彼らに近代的人的労働者とは若干異つた性格に職人氣質を附與している。双物工場の經營者が直面する對内的困難は、このような職人的労働者をもつ労働者を自分の手に確保することの困難である。戸車工場でも熟練労働者がいる。しかしその熟練労働者にとつては、自營の機會が相對的に少い。しかも彼らの數が多くはないから、その工場の經營者が給料等の面において彼らに特別の配慮をなすことができる。

第二型の例として擧げた双物はM金物のうちで最高の生産額をもっている。しかもそれはM金物業の性格を典型的に表示するものであるということが強調されなくてはならぬ。M金物の性格は双物において集約的に表現されている。双物という製品の型がカジをして工場生産に對して強い抵抗力を發揮することを可能にし、前期的生産方法を現在に至るまで温存せしめている。そしてこの前期的方法がM市金物業のみではなく、それを主要な産業とするM市に特有な社會的色彩を帯びさせている。双物は金物業の近代化を阻んで、金物業における問屋制度を維持せしめる役割を果している。これまでM市金物業の特色として述べてきた殆んど凡てのこと、更にこれから述べようとする多

くのことは、この双物を中心として説明することができる。

機械化に依存する近代工場は零細業者の競争を不可能にして、益々延びる傾向がある。ところが双物工場は一定の規模に達すると、むしろ衰退に向う傾向がある。かくしてM市において、従業員二〇人以上の双物工場は皆無に近い。例外的に某問屋の直營工場で、従業員五〇名という双物工場がある。ここでは鋸を主體として鑿、鉋等が生産されている。これを直營している問屋はM市の最大の問屋の一つである。

この工場は戦時中の所産であり、中間商人の排除が強行された時代、某問屋が生産面に活路を求めするために設立された。先づこの工場の設立の動機が戦時統制という特殊な状況から出てきたのであり、正常な經濟的採算に立脚して、この工場が設立されたのではないということ念頭に置かなくてはならぬ。設立はこの問屋がその専屬カジを集めて一つの屋根の下に收容して、工場組織を形成するという経過をとつた。専屬制度の下ではカジは實質上の賃銀労働者の地位にある。従つて問屋がその専屬カジを集めて直營工場を設立するということは比較的容易に遂行された。戦時中は經營の重點が工場部門に置かれたが、戦後は工場の規模を一五〇人から五〇人に縮小すると同時に、重點が問屋部門に移つた。

この工場を覗いてみると、機械としてはスプリングベンマ、グラインダー等の簡易なものがあるにすぎない。それらは双物カジの所にあるものと略同じものである。ただ目立っているのはグラインダーに被覆がついていることである。カジのところではこの被覆が缺けている。これはこの工場が労働法規に基づく監督を受けていることを示している。分業は確にカジのところより進んでいる。各がその専門的仕事を分擔している。しかしこの分業による利益よりも労働法規の制約による損失の方がむしろ大い。従つてこの面からしてカジとの競争力を減殺されている。それにも

拘らずこの工場が維持されているのは、問屋との直結の利點があり、問屋に注文が殺到した場合に、この注文を處理するのに便利であるということに求められる。しかしこの理由だけではこの維持の理由を説明し盡すことはできない。従來の關係からして經營者が従業員の生活保障に對してもつて責任感、更に經營者が地元の人であるから、體面を考へて止められないというような經濟外的要因が働いているようだ。採算がとれず、結局問屋利潤から工場の損失を穴埋めしているというのが實狀に近いのであろう。かかる状態であるから、他の問屋がこれに倣つて直營工場をもとうとする氣配はない。

以上金物工場の二つの型について述べた。次に問屋との關係に重點を置いて、カジと比較しての金物工場の共通的特色を挙げよう。

先づカジにおいては、製品がその手元で商品化されないことが多いが、金物工場では手元で商品化が完成しているという點に注目しなくてはならぬ。金物工場は自己の商標をもち、その手元で直ちに販賣しうる形で包装をも完了して製品を出荷する。従つて消費地に取引先を見出すことができさえすれば、地元問屋を経由せずに直接販賣することが可能である。この業者は殆んどが従來のカジの出身であり、過去の經驗からして問屋に反撥の感情をもつていない。又彼らの經濟的利益からしても直接販賣の方が有利である。直結する場合には、問屋が賣るより多少安くしなければならないとしても、この差額は問屋の利潤より少いのが普通である。各地でM金物の見本市が開催されているが、この場合製造業者が直接に名前を出し、價格を表示している。これは問屋に對する製造業者の力が増大してきていることを示す。この見本市を通じて消費地問屋と製造業者との間の直接取引が促進される。直接取引をする製造業者は通常金物工場の規模のものである。この相手方となる消費地問屋は比較的大きなものであり、この問屋はM

問屋にとつても上顧客である。M問屋は見本を携へて、絶えず行商して歩くから、大して見本市を必要としない。見本市はM問屋にとつてむしろ迷惑である。しかし地元物産の紹介という大義名分があるから、表面から反對する譯にはいかない。

このように金物工場は地元問屋から離れようとする傾向があるのみならず、問屋と製造業者との關係に從來とは異つた型を打出すのに與つて力があつた。即ち以前は強固な問屋制度の下において、製造業者が問屋に從屬していたのに對して、逆に後者が前者に從屬するという型が出てきている。金物工場の中にはブームの時代の蓄積によつて資金的にも恵まれてきており、かつ金融機關からの借入の道も開かれているものが出てきた。これらのものは相當期間後の後拂で製品を問屋に賣渡す餘裕をもつている。かくて「賣子的問屋」という新型の問屋が成立する。これについては後で問屋のところであらう。

M市の労働者の賃銀特に金物工場のそれは低い。金物工場の賃銀は全國的水準からみて低いのみならず、M市の水準からみても低い。M市の給與所得の平均は七、八千圓である。これを職業別にみると銀行の一萬六千圓が最高であり、次いで國家公務員の一萬五百圓、地方公務員の九千五百圓近代工場の九千二百圓の順になる。ところが金物工場では一人前の男子で日給二五〇圓乃至三〇〇圓が普通であり、三五〇圓をとるものは稀である。月收の平均は六千圓位である。金物工場でも特殊な熟練労働者は勿論この金額を越えるが、その金額はそう大くはない。例えば前述の戸車工場の鑄物部門を擔當する熟練労働者は九千圓であり、近代工場の労働者の水準を越えてはいない。因に昭和二五年八月から同二六年七月に亘る一年間の平均賃銀額は全國を一〇〇とすれば、M市の製造業では四七・二、金物製造業では四三である。

〔C〕

金物製造業者の大部分は零細規模の所謂カジである。この層にも若干の變化が生じた。電動機及び簡易な機械の使用が普及すると共に、經營規模が多少とも大きくなってきた。この變化は昭和初頭から漸次起つてきて、戦時中に急速に進行した。昭和八年には製造業者の一四%が電動機を使用しているにすぎなかつたが、現在ではその約六〇%がこれを使用している。これと並行してスプリングハンマ、グラインダー等の簡易な機械が使用せられるようになってきた。これによつて労働生産力は品種によつては倍加するようになった。

終戦直後のブームにおいて、カジはわが世を謳歌しえたが、間もなく襲つてきた不況はカジを困難な状況に置いた。經濟界の不況が抵抗力の弱いところへ皺よせされてくる。しかし不況に直面してカジは或種の金物工場よりも、むしろ強い抵抗力を示す。賃銀労働者として脱出の道を見出ないところでは、カジは根強い生活力の發揮を餘儀なくされる。カジの困窮につれて、小口金融の要望が強くなってくるが、正規の金融機關はこれを充たさない。金融面の打開を目的として協同組合が作られたが、これに多くを期待することができなるとすれば、カジの間屋への從屬が再び強化される形勢がみられる。

カジの比較的上層の一例として羅紗鉄製造工場をみる。M市で羅紗鉄を作るようになったのは戦後である。この労働力は主人とその子二人、徒弟二人、職人一人という構成である。機械設備としては數臺のグラインダー以外に目ぼしいものはない。グラインダーに危険防止の被覆がついていないということは、労働條件の劣悪を物語っている。カジの上層でさえそうであるから、その下層については思いやられる。ここでは素材として某製鋼所製の新鐵が使われているが、古鐵を使っているカジの方がむしろ多い。間屋渡し一五〇圓の品が小賣店では四五〇圓という正札

がついていたそうである。尤もこれは極端な例であろうが、金融面の逼迫からしてカジは間屋の重壓をうける。

もう一軒のカジを覗くと、そこでは古い針金を利用して丸型の掛金を作っていた。作業所には六〇歳を越える老母、妻子及び一人の徒弟が働いていた。古鐵の使用と家族労働力——これがM市のカジの大部分の姿であり、それによつて辛うじて工場生産に對抗している。作業場は晝でも暗く、床はむき出しの土であり、電動機は使われていない。しかしこれ以上に零細なものはいくらでもある。古い針金を延ばして、切斷し、釘を作っているところでは家族以外のものを見出せない。このようなカジの収入は明らかに賃銀労働者のそれを下廻っている。

〔D〕

戦後において、間屋制度は解體の傾向を辿り、最早間屋は金物業の絶対的主權者ではなくなつてきている。間屋の地位は外的には近代工場によつて壓迫されると同時に、内的には金物工場によつて脅かされる。更にカジの規模の拡大につれて、従來のような支配力を振ることが困難となつてくる。

間屋の弱體化を端的に示すのは、賣子的間屋の出現である。従來の間屋については、これまでかなりふれてきたから、ここではこの新型の間屋について多く述べる。この間屋は戦後のブームと共に發生してきた。終戦と略同時に、戦火を免れたM市に各地からの注文と直接の購買者が殺到した。この需要に答えるために素人間屋が軒並みにできた。全市の戸數の七%に近いものが金物間屋になつた。一方におけるこのような巨大な需要と他方における製造業者の富裕とが賣子的間屋の成立を可能にした。従來の間屋はカジが持込む製品を何時でも即金で買とり、藏に入れて置く資力をもつていた。このような資力を背景としてカジを隷従せしめていた。ところが賣子的間屋は掛で仕入れて、賣上を回収した後に支拂うのが普通である。この型の間屋は殆んど資金を要せずして、始められる。間屋が雨後の筍

よりも濫立したのはこのような事情による。新型の間屋は主に金物工場に結び付く。何故ならばカジは掛賣する程度の餘裕がないものが多いからである。従つて戦後における金物工場の發展は賣子的間屋の盛大な出現を可能にした。富裕な金物工場と零細な賣子的間屋とが結合している場合には、當然この間屋の利潤の幅は狭くなる。

終戦直後に濫立した素人間屋は比較的早く淘汰されてしまつたが、番頭の獨立はこの賣子的間屋という形で促進された。番頭は六、七千圓の給料しか貰つていないから早く獨立したがる。カジを始めるには家があつても三〇萬圓位必要であるが、賣子間屋を開業するにはそれ程の資金も必要としない。かつてとは丁度反對の光景が展開される。かつてはカジは簡単な道具さえあれば開業できたが、現在では多少の機械的設備が必要になつてゐる。これに反してかつての専屬カジをもつていた間屋は相當の資金を必要としたが、賣子的間屋は大した資金なくして開業せらる。かつて専屬制度の崩壊と金物製造業者の富裕は一方において間屋制度の解體を齎らすが、他方においては新型の間屋の成立を導いたといえる。このような事情が間屋の敷を極めて急速に増加せしめた。昭和十二、三年と戦後の好況時とを比べると間屋の敷は四倍にふえた。金物製造業の敷は同じ期間において二、三〇%しか増加していない。かかる相對的に遙かに大い間屋敷の増加率は、製造業者との關係において間屋を不利な地位に置く。

専屬制度は一般に崩壊し、有力な間屋の若干がこれに近い型を維持しているにすぎない。現在では、假令カジが特定の問屋に専ら納品するとしても、従来の専屬關係に附隨していた身分的隸屬關係は色失せて、相互の關係は單なる經濟的關係となりつつある。従つてかつての専屬制度と比べると、相互を結びつける絆は弱くなつてゐる。従来から存続している問屋でも、その多くのものが多少とも賣子的性格をもつようになつてゐる。例えば或問屋は仕入のうち四〇%は現金で、六〇%は月末拂で買つてゐる。しかもかつてのように資金の餘裕がないから、在庫が少いのみでは

なく、販賣先での集金も年三、四回では足りず、賣上一カ月後には集金に廻つてゐる。この状態では製造業者に對する買掛金ができる。更に株式組織にする場合、製造業者に株式の一部を引受けて貰つてゐるといふ例も少くはない。

四

戦後暫らくは好況であつたが、それは長く續かなかつた。昭和二四年に比べて、その翌年における製造業従事者の減少は、不況を物語つてゐる。昭和二五年六月に發生した朝鮮動亂を一つの契機として、昭和二六年においては前年に比べてこの従事者数が約三〇%増加した。しかしこの影響は主に工場に對してであり、カジは反つて原料高によつて困難になつたようにさえ見える。M市金物業の好況は過去において第一次大戦當時、關東大震災後というような時期にあつたが、いずれもそう長くは續かず、それ以外の期間は不況又は沈滞の時が多かつた。戦前における中國、朝鮮等の市場がなくなり、それに代る輸出の開拓が難しいから、戦後の不況は特にこたえる。

不況によつて問屋も製造業者も共に苦しくなるが、しかし不況は兩者に相異つた影響を與えているようである。或種の金物製造業に對しては、不況は業者の零細化を促進する方向に作用している。カジと全く異なる製品を作つてゐる工場は問題はない。しかしカジとの競争を惹起するような製品を作つてゐるところでは、工場組織の採用による合理化が、カジの法的に制約されない低廉勞働力の壓力に打勝つことは容易ではない。第一型の金物工場はこの競争と勝者となる可能性がある。しかし第二型の工場特に双物工場はこの競争に耐えられず、双物製造業の零細化を導くおそれがある。これに反して問屋については、戦後發生した弱體な賣子的間屋の整理を通じて、有力な問屋のみが残存する傾向がみられる。カジ、工場の資金難は賣子的間屋に掛賣する餘裕をなくし、この面からも賣子的間屋は淘汰され

る。かつて五、六〇〇を数えた問屋が現在では三〇〇を遙かに下廻つていくという事実はこの傾向を示している。一方における製造業者の資金難と他方における問屋数の減少は、問屋に有利な条件を作り出す。生き残つた有力な問屋は製造業者の零細化、困窮化を手掛りとして自己の發言權を強化する。かくて終戦直後における問屋と製造業者との勢力関係の逆轉を再び逆轉せしめるかにもみられないことはない。戦中、戦後の経過は一時的攪亂であり、かつてのような軌道が次第に再建されるかにみえる。

しかしよくみると、この再逆轉の過程を通じてさえ、戦後の事態は以前のものと異つていく。昭和一二、三年と比べて、尙現在問屋数は七〇%程度増加しており、同期間における製造業者数の増加率二、三〇%とは未だかなりの開きがある。更に質的にみても、強固な専屬制度に基づいてカジの死活の權を握つていたかつての問屋と現在の問屋とは實力の相異がある。又次のことを忘れてはならない。即ち不況にも耐えうる型の金物工場は問屋の排除の方向に活路を見出そうとしている。問屋制度を内部的に破壊せしめる契機は不況においてもなくなつてはいない。

次に注意しなければならぬのは、問屋制度を外部から解體せしめる契機としての近代工場である。近代工場は金物業の不況をよそにして一段と發展している。國內大衆の消費を主な對象としている金物の販路の逼迫にも拘らず、新型製品は輸出及び特需の面で市場の開拓が有望視されている。現在においてもM市における近代工場の数は少いが、生産額では金物製造業全體に匹敵する大きさを示している。金物業の前途に對する悲觀的見透しと近代工場に寄せられる期待とは皮肉な對照をなしている。苦境からの脱出の道は輸出、特需を對象とし、従つて近代工場の發展に俟つべきであるという聲は既に地元からも出ている。これはいうまでもなく問屋制度の基盤を根底から崩す方策である。この道がM市の大衆の生活水準を上げるならば、小生産者から賃銀労働者への轉化は悲しむべきことではない。

産業の近代化の進行によつて、M市の給與所得の水準も國內的水準に近づくだろうということが豫想される。

この新しい分野が地元資本の力だけで急速に成長するとは考えられない。従つて地元外の資本の導入、工場の誘致が必要となる。かつて大工場の誘致問題が生じたとき、この町の實力者は消極的態度をとつた。この分野の成長は革命的影響を及ぼすが故に、稍もすればそれは現在の實力者の利害と一致しない。外部資本の導入によつて、この町の工場は大都市に本部を置く大資本の一環として繰入れられるだろう。これによつて賃銀労働者の層が廣汎に發生し、かつての身分的・封建的階級意識が拂拭されて、近代的階級意識が形成される客觀的基盤が築かれる。かつての問屋とカジとの身分的關係は勞資の經濟的關係によつて置換される。それと共に産業の地域的特殊性、具體的にはM市金物業がもつていふような特殊な地方色がなくなり、産業はM市という狭い地域社會の範圍を越えて、より大きな社會へ適合するようになる。かくて産業と地域社會との密接な關係に基づいて、産業の地域的特殊性を解明しようとする研究が大した意味をもたなくなつてくる事態が展開される。

しかしわが國の經濟的・社會的な情勢からみると、M市の産業革命及びそれに基づく社會の革新の急速な實現を豫言することは難しい。それどころか、不況に直面して舊體制への逆轉の氣配が、幽かではあるがみられる。崩れ去るかに見えたものが意外に強い生命力をもつている。

後記 奥井教授との協同研究について、昨年塾の學事振興資金の交付を受けた。これによつて筆者は昨夏約半月間に亘り、M市の現地調査を行った。この成果を纏めたものがこの論文である。M市金物業の調査は本年においても繼續する豫定であり、その實態の把握は未だ充分ではない。これが地名を匿名にした理由の一つである。